遠藤　秀文 (技術士、Apec Engineer)

株式会社ふたば　代表取締役社長

（富岡本社、郡山支社）

- 1971年に福島県双葉郡富岡町に生まれる。大学卒業後に大手建設コンサルタントに入社し、アフリカ、中東、東南アジア、大洋州、中米など約30カ国でODAの開発事業に従事。
- 2008年8月双葉測量設計(株)の専取締役に就任し帰郷。東日本大震災の1ヵ月後に富岡町の本社機能を郡山市に移し、事業再開。
- 2013年12月に社名を株式会社ふたばに変更し、代表取締役社長に就任。福島県内の復興・再生および主に海外島嶼国の防災計画、環境保全などに携っている。2017年8月28日に富岡町に新本社社屋、郡山市に新支社屋を開所。
- 建設コンサルタント⇒社会コンサルタントを目指す。
- **他役職:**一般社団法人とみおかワインドメーヌ代表理事、福島県測量設計業協会理事、富岡町商工会理事、富岡町観光協会副会長、富岡国際交流協会副代表、他。

株式会社ふたばの６つのサービス

FUTABA.

（一社）とみおかワインドメーヌ　代表理事

これまで

各地に避難する**町民10名有志**が集まって活動開始

太平洋を望む丘の上にブドウ畑を整備
(小浜圃場)

避難解除1年前の2016年3月からブドウの試験栽培を開始

ブドウを植えて4年後の**2019年にワインが完成**
(醸造は外部委託)

これから

- 東京駅から一本でアクセス可能な**富岡駅前の土地(4.5ha)**で本格的に事業展開を開始
- ブドウ畑だけでなく、醸造設備やワイン販売所も併設した**ワイナリーを整備予定**
- **日本で最も海そして駅から近いワイナリーを目指す**

１Ｆ（福島第一原発）廃炉の将来像について

地域未来牽引企業

- 廃炉進行中の１Ｆは後世にどのような形で伝えるべきか。
- この地域を世界遺産登録を目指す場合、１Ｆの役割とは。
- 福島そして原発被災地域の現状は、１Ｆが一丁目一番地。
- 広島原爆ドームは残すか賛否が分かれた。結果的に世界遺産登録に大きな存在となり、現在に至り国内外から「平和」のシンボル的な存在となっている。広島・長崎は「平和」
- 「福島」は“何か”“どのようなシンボルか” を定めることができたときに、１Ｆの将来像は見えてくると考える。

FUTABA

1F 世界遺産登録の目的や推進のあり方について

地域未来牽引企業

- １Ｆのみに焦点を当てて、世界遺産としての価値があるか。
- 原発事故の影響を受け現存する施設、集落等、多重災害の現実とそれを乗り越える地域再生のプロセスを融合することで、より大きな意味が見えてくるのではないか。
- 双葉郡地域を俯瞰的に見て、後世に残すべきもの、新たな価値を生み出すもの、再生・創造していくべきものを冷静に検討する時期ではないか。
- これらを整理することで、世界遺産というものが見えてくるのではないか。
- 世界遺産が見えてくれば、散在した思いやコミュニティーの方向性が整い、地域間の協力体制も進むのではないか。チーム福島も意識され、福島が目指すべきビジョンが定まっていくのではないかと考える。

FUTABA

類似の世界遺産

地域未来牽引企業

- **広島県・原爆ドーム**（1996年12月）ユネスコ第20回世界遺産委員会メリダ会議で、核兵器の惨禍を伝える建築物として
- **ポーランド：アウシュヴィッツ=ビルケナウ強制収容**（1979年）：ナチス・ドイツがユダヤ人を虐殺した強制収容所：二度と同じような過ちが起こらないようにとの願いを込めて
- **マーシャル諸島共和国　ビキニ環礁**（2010年）：第二次世界大戦後の最初の核実験（原子爆弾実験）と、それ以降1958年まで23回の核実験（原子爆弾および水素爆弾）が行われた環礁
- **オーストラリアの囚人遺跡群**（2010年）：18世紀から19世紀にオーストラリアで大英帝国によって建てられた刑場遺跡。
- **ボリビア　ポトシ市街**（2014年）：過酷な労働から「人を食う山」と恐れられた銀鉱山の下で発達した町。

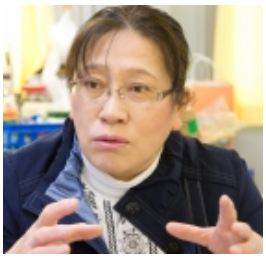
その他多数。

負の世界遺産 - Wikipedia：世界遺産のうち、人類が犯した悲惨な出来事を伝え、そうした悲劇を二度と起こさないための戒めとなる物件を指す[1]、日本国内での用語である。ユネスコが公式にそのような分類をしているわけではなく、明確な定義は存在しない。

FUTABA.

私見
１F廃炉の将来像と１F世界遺産登録の目的や推進のあり方について
～いわきに暮らす者として～

自己紹介



吉田　恵美子　（よしだ　えみこ）

特定非営利活動法人ザ・ピープル理事長
いわきおてんとSUN企業組合　代表理事
一社）ふくしまオーガニックコットン
プロジェクト　代表理事

一旦教壇に立ったが、福島県いわき市に戻り専業主婦となる。社会とのつながりを求め、仲間と1990年ボランティアグループ ザ・ピープルを立ち上げ、古着リサイクル活動を中心に住民主体のまちづくりを実践。東日本大震災後、被災者・避難者支援活動をきっかけに「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」など、地域のNPOの連携組織が牽引する住民自らの手による未来創りに取り組む。
(財)いわき市国際交流協会理事　災害支援ネットワークいわき副理事長　いわき市民間国際交流・協力団体連絡会事務局長

「1F廃炉の先」を考えてきて感じること

◆発災直後から変わらず言われている「廃炉まで30～40年」というタイムスケジュールの違和感
◆科学的課題としてではなく社会的課題として考える必要性
◆エンドステートとして更地を目指すことの難しさ
◆責任世代がこれまで棚上げにしてきた、コミュニティの中で論じることの必要性
◆福島浜通りに今ある現実を残すことの意義の再確認

これからすべきことは何か？

◆地域の大学生と東日本大震災・原子力災害伝承館を見学した際に痛切に感じた、あの日の学びを伝えようとしていない地域の現状
◆「ものが語る」・「人が語る」 その両面があって初めて本質が伝えられるとしたら、「語るべきもの」を失ってしまってからでは伝えられない
「語れる人」を亡くしてからでは伝えられない
◆地域のエゴではなく人類のための議論のスタートが求められている

今、世界遺産を目指すことで
地域に何がもたらされるだろうか？

チェルノブイリの選択⇔福島の選択

1　テーマ　ふたば未来学園の探究学習から１F廃炉の将来像について考える

自己紹介

林　裕文
HAYASHI　HIROFUMI

出身	福島県福島市
教員歴	２１年（本校４年目）
教科	地歴公民科（世界史）
校務分掌	○企画研究開発部部長（R３～） 去年までは３年間担任
双葉郡とのつながり	妻の実家が双葉郡双葉町 (帰還困難区域：東日本大震災・原子力伝承館の周辺)

2　ふたば未来学園の未来創造探究（２・３年次）

2年次以降は６つのゼミに分かれて課題解決の探究と実践に取り組む。

原子力防災探究

原子力災害によって失われた地域コミュニティの再構築について研究する。

町村の祭りを復活させる
双葉郡ツアーの企画など

メディア・コミュニケーション探究

海外を含めた、異文化の方々に向けた情報発信やコミュニケーションの有効な方策を研究する。

双葉郡のイメージ改善
中高交流会の企画など

再生可能エネルギー探究

福島の現状を踏まえた、望ましい人間社会と、地球環境やエネルギーの関係性について研究する。

藻類発電
波力発電など

アグリ・ビジネス探究

福島の復興につなげる、今後の農業とビジネスを研究する。

8町村の特産品を用いた
商品開発など

スポーツと健康探究

福島の地域を、スポーツを通じて豊かにする方策を研究する。

Jヴィレッジからの地域復興
広野町運動会の企画など

福祉と健康探究

福島の地域において、少子高齢化が加速する中での健康長寿の実現の方策を研究する。

高齢者と健康
高齢者・子供の地域内交流など

2

3　生徒の探究テーマを分析
【テキストマイニング（TM）1～４期生】

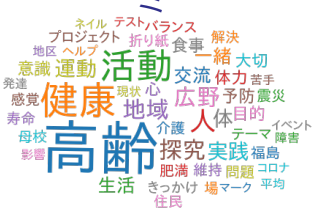
原子力防災探究ゼミ

メディア・コミュニケーション探究ゼミ

再生可能エネルギー探究ゼミ

アグリビジネスゼミ

健康と福祉ゼミ



スポーツと健康ゼミ

4　生徒のTMから見えること

ありがちな例

○風評被害の払拭

○教訓を後世に伝える・語り継ぐ

生徒たちの探究に足りない視点

→誰が風評被害を受けているの？

→その被害は風評？実害？データがない

→語り継ぐべき教訓とはどのようなもの？

「語り継ぐ教訓」の前に…

地域の今をきちんと終えていない

今現在取り残されている人はいないのか？

「原子力緊急事態宣言」は継続中

5　まとめ：これからの探究学習

生徒たちの探究に必要な視点

○原子力災害に関するデータや知見の集積・発信、法的アプローチ

地域社会に求める視点

○原発事故で「取り残される人」がいる中での

　　１Fの世界遺産化は地域住民の理解が

　　得られないのではないか？

（国策に対する地域住民の疑念）

（弱者に対するアプローチ不足）

原子力産業に最適
福島民報
開発ビジョンまとまる
まず燃料の再処理
関連工場群の誘致も
いわき国際研究都市に
消費米
水をひらく

福島民報1968（S43）年
９月４日（水）朝刊より

生徒たちの探究学習を
浜通りの住民のウェルビーイング向上につなげたい
→地域の内発的発展に寄り添

5

髙垣慶太（たかがき けいた）

元崇徳高校新聞部 平和問題担当班
早稲田大学 社会科学部 社会科学科１年

・赤十字国際委員会（ICRC）駐日代表部ボランティアスタッフ
・ICANキャンペナー（カクワカ広島・KNOW NUKES TOKYO）
・すすめ！核兵器禁止条約プロジェクト
・Hihukushoラジオ
・投票所はあっちじゃけぇ etc.

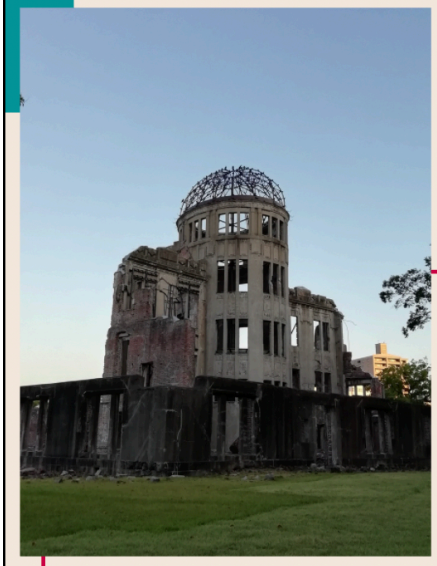
被爆建物「被服支廠」

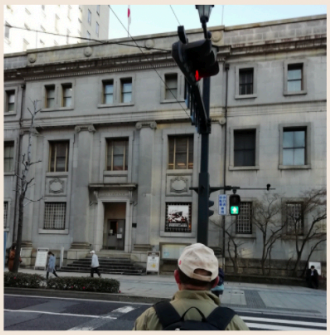
・4棟の赤レンガ倉庫
・軍服等を製造・貯蔵していた陸軍の施設
・原爆投下直後は臨時救護所となった
・2019年12月に3棟を所有する県が
「2棟解体1棟外観保存」の解体案を示す

湾曲した鉄扉

崇徳学園新聞
若者どうしで話し合う
旧陸軍被服支廠の価値について
旧陸軍被服支廠の解体 県が検討
崇徳学園新聞
NEWS 201

「声なき被爆者」被爆建物



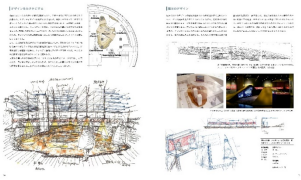


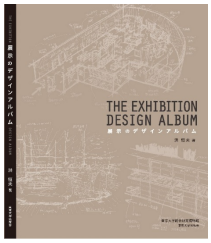
「声なき被災者」震災遺構

洪　恒夫

東京大学総合研究博物館特任教授
ミュージアムテクノロジー研究部門
tushtkou@um.u-tokyo.ac.jp

1960年神奈川県横浜市生まれ。
武蔵野美術大学卒業。
以来博物館、ミュージアム、博覧会、テーマパークなどの幅広い分野の施設プランニング、デザイン、プロデュースを手掛ける。
2002年より東京大学総合研究博物館にて展示や博物館の可能性について実践的な研究を推進。
専門は展示・空間デザイン





著書　「展示のデザインアルバム」
（東京大学出版会・2019）

2021.11.14

福島の教訓をどのように未来世代へ発展的に継承するのか

福島浜通りにおけるパイロット事業の拠点構想と１F廃炉について

東京大学総合研究博物館
洪　恒夫

拠点が実効性を発揮するかたちとして「エコミュージアム」を施設構造を参考にてみる

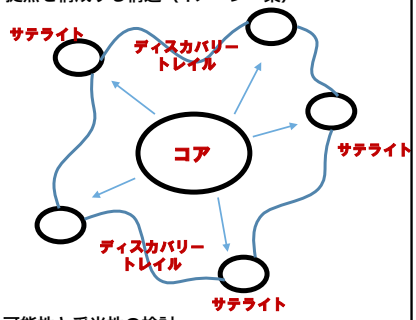
エコミュージアムとは（文部科学省HPより）

エコミュージアムとは「ある一定の文化圏を構成する地域の人びとの生活と、その自然、文化および社会環境の発展過程を史的に研究し、それらの遺産を現地において保存、育成、展示することによって、当該地域社会の発展に寄与することを目的とする野外博物館」と定義づけられている。

そして、その運営は、住民参加を原則とし、
普通の博物館と違って対象とする地域内にコアと呼ぶ中核施設（情報・調査研究センター）と、自然・文化・産業などの遺産を展示するサテライト（アンテナ）、新たな発見を見い出す小径（ディスカバリートレイル）などを配置し、来訪者が地域社会をより積極的に理解するシステムで行われている。

（出典「エコミュージアムについて」法政大学教授　馬場憲一）

拠点を構成する構造（イメージ：案）



可能性と妥当性の検討

コ　ア　　活用施設は？訴求に用いるリソースは？
サテライト　　ロケーションは？リソースは？
ディスカバリートレイル　　ロケーションは？リソースは？

サテライトとしての１F廃炉の意味と力

エコミュージアムのサテライト（アンテナ）はその性格は多様であるがその場のリアルを訴求する「ロケーション」や、出来事やドキュメントを物語る「遺構」などは、大きな訴求力を持つ。

福島の教訓を未来世代に発展的に継承するうえで、IF廃炉はまさに出来事の象徴であり、これを翻訳することで多くの情報や語りが提供される。

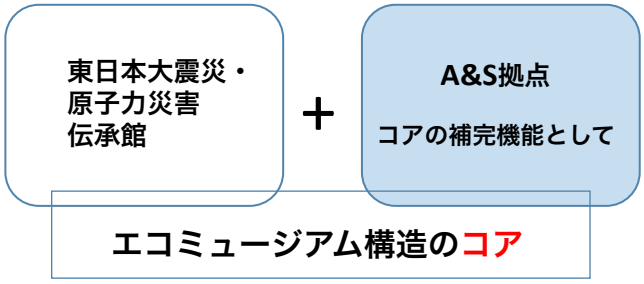
何よりも、そのものと対峙することで得られる体感、実感は実物ならではの大きな力を持つ。一方で、今後の研究における対象としても大きな存在となると考えられる。

サテライトをエコミュージアムの構造に沿ってコア、トレイルと連携させることで、通常の展示・情報施設の枠を超えた拠点としての効果を生み出すものと考える。

コア施設へのアイディア提案

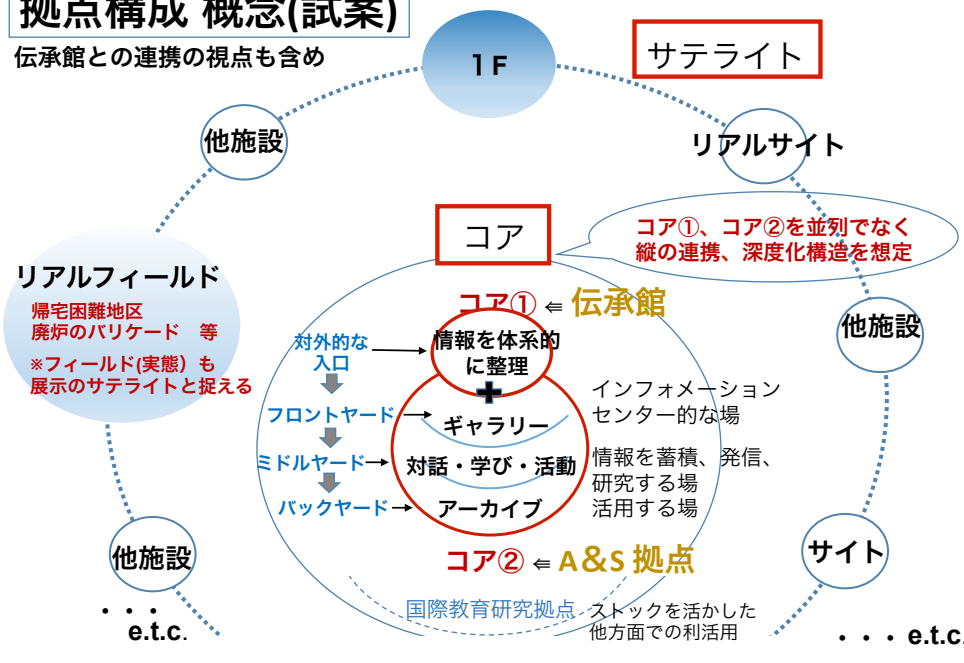
・提案として、昨年９月にオープンした「東日本大震災・原子力災害伝承館」をエコミュージアム構造のコアに位置づける

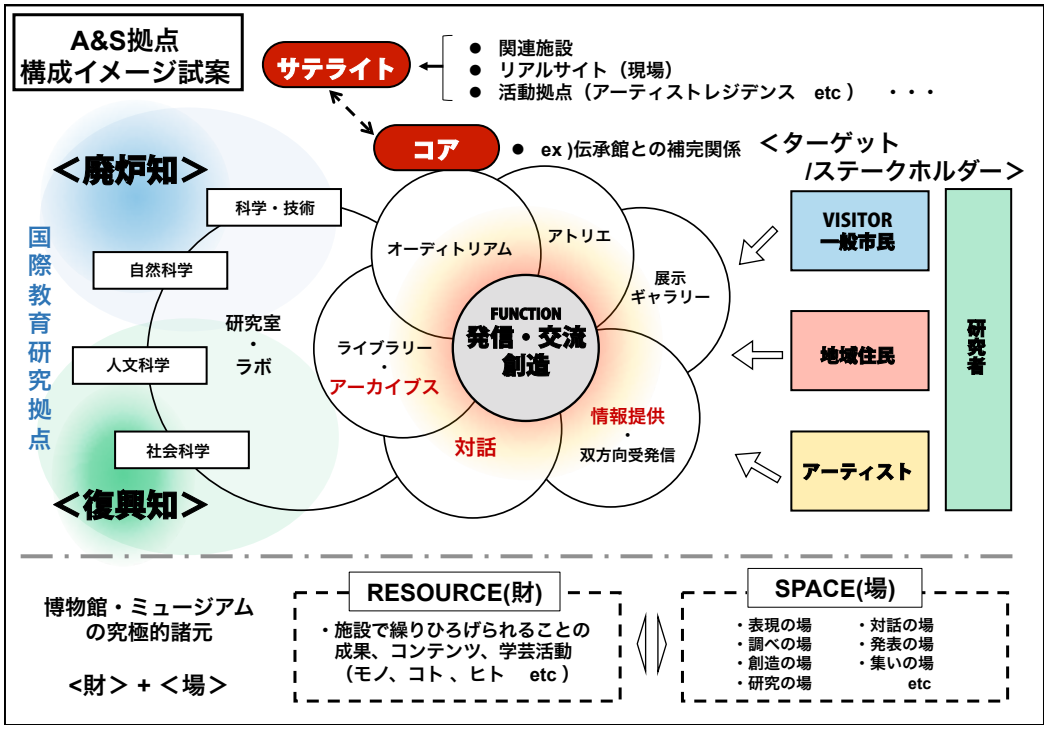
・望まれる拠点施設の「マスタープラン」において課題があれば、A&S拠点を本構想の理念に基づき、補完する機能（施設）としてその導入を検討



拠点構成 概念(試案)

伝承館との連携の視点も含め





参 考

楢葉町・東京大学との官学連携ミュージアム（再来年初開館予定）
→「サテライト」の一つとして考えられる

全体空間イメージ